

ランドスケープ計画・設計論

丸田頼一・島田正文編著

ISBN978-4-7655-2128-4
B5判・336頁 本体4000円＋税

ランドスケープアーキテクチャーは、土地が有する固有の自然の潜在性や資源の存在を基盤としつつ、歴史、文化などの諸要素も関連させ、適切な科学技術的対応と美に関する心理的意識にも配慮し、総合的な環境づくりやレクリエーション空間の永続的確保を図ってきた分野である。本書は、このようなランドスケープアーキテクチャーについて、設計図、写真や図表を多用し、使いやすかつ分かりやすいようにまとめたもの。学生、技術者だけでなく、一般の方にも読みやすく作りました。

地球と暮らすまちづくり

スイス・ドイツに学ぶ近自然

長谷川明子著

ISBN978-4-7655-3433-8
A5判・176頁 本体2200円＋税

夏は小川で涼をとり、冬はゴミの燃料で暖かく、夜になれば星が瞬き、いつでも土の上を散歩できる。そのように地球を感じながら笑顔で暮らす方法を実践している国がある。本書は、環境と都市生活の両立を目指して、長い試行錯誤の経験を積んでいるスイスとドイツの先進事例をまとめた。地球温暖化が深刻化するなか持続可能なまちづくりが求められている。これらの事例から学べることは多い。

みんなでつくる美しい道

鈴木忠義編著／道路緑化保全協会編

ISBN978-4-7655-1719-5
A5判・124頁 本体1800円＋税

道は、経済社会の基であると同時に、文化社会の基であるはずである。人々は、その国の道を通ってまず知覚し、ひとに会い、ここを通じて、理性の力でその国を評価している。もの（道）・こと（人）・ところ（心）により、その国の印象は決定づけられる。ものは道そのものである。ことは道の使われ方である。ここはその結果、安全・快適であり道に愛情や感動を懐くことである。本書はまず人間生存のため、道とのかかわりを示した。次に様々な目的をもった道のつくり方、その使い方を改めて認識する機会とした。これらの目的は、今後の道づくり、使い方を考えていくことである。すなわち道づくりの思想の大切なことを意識し、喚起するきっかけとなればと願ったものである。

都市の緑はどうあるべきか

東京緑地計画の考察から

真田純子著

ISBN978-4-7655-1713-3
A5判・206頁 本体3200円＋税

「緑」には環境改善の役割が期待され、1970年代初めには法制化も行われ、都市内の緑地の確保や緑化が義務づけられました。しかし、その中で「緑」は無条件に良いものと見なされ、いかに増やすかといった量的側面だけが課題となっています。本書は、実現しなかった「東京緑地計画」の考察を通じて、緑は単に存在すれば意義があるのではなく、その自然の楽しみ、行楽の楽しみ、また風景として捉えることの重要性を論考します。

グリーンセラピー読本

田畑貞寿編著／大野由起子著

ISBN978-4-7655-3450-5
A5判・162頁 本体2000円＋税

現代社会がストレス社会だと言われて久しい。誰もが気忙しく日々の生活を送り、それに慣らされていつているかのようです。関係ないと思っていた世界情勢により職を失ったり、就職できなかつたり、仕事が忙しくなったり、社会も個人もゆとりのない状況に陥り、それが続いています。社会が忙しいと、人はそれに追い回されてしまうし、逆に一人ひとりの気持ちに余裕がないと、社会全体もギスギスしてしまいます。パワースポットに行けたり、癒しがブームになっているのを見ますと、癒されたいと思っている人が多いことがわかります。癒しには、音楽療法やアロマセラピーをはじめ様々なものがありますが、今の時代だからこそ緑による癒しを勧めたいというのが本書の目的です。